
ブラザークエスト その4

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザークエスト その4

【Nコード】

N2939M

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

ついに兄と再会した北条アキラ。

しかし兄は、その生い立ちから歪んだ人間になってしまっていた。

そして命がけのゲームを提案してきた。

生き残るのは…いったい誰なのか…？

作：青木弘樹

「ゲーム？」

「そうだ」

ナオトはそう言うと、いきなり銃を誰もいないほうに向け、撃つた。

”パン！パン！パン！パン！”

「！？」

俺は驚いた。まゆみさんも驚いているようだった。

「さて…これでこのリボルバーの弾倉には弾は残り一発だ」

そう言うとナオトは弾倉をクルクルつと回した。

”カチャ”

「これでよし」

「いったい…」

「ほら、映画とかで見たことあるだろ？ロシアンルーレットってやつさ」

「ロシアン…ルーレット？」

「今から俺とお前で一回ずつ引き金を引いていく」

「！？」

「死んだら負け。ゲームオーバー。死んだほうは、まさに負け組みになるわけだな」

「そんな…バカなこと…」

「やらないならこの女を殺すぞ」

そう言うとナオトはサバイバルナイフを取り出した。

「！？」

「じゃあ、さっそく始めよう。まずは俺からだ」

ナオトは銃口を頭にあてた。

「ちょ……」

”カチッ”

「ふう。助かったぜ。ほら、お前だ」

ナオトは拳銃を床に置いた。

「……」

「早く拾えよ。それから妙なまねをしたら、このナイフでこの女の心臓突き刺すぞ」

「く……狂ってる……」

「かもな……」

「……」

俺は拳銃を拾った。重い。本物の拳銃はこんなに重いのか……。いや、あるいはこの状況がそう思わせているのかもしれない。といっても、子供のころ遊んだ銀玉鉄砲と比べてのことだから意味もないが。

俺は銃を頭にあてた。こうなったらやるしかない。まゆみさんのためにも。

「ふふふ……」

ナオトは笑っていた。

「……」

”カチッ”

不発だった。

「おお、やるねえ」

「……」

生きている……、が気分的には生きた心地はしない。

「よし。銃を床に置け」

俺は銃を床に置いた。

「さてと……」

ナオトは銃を拾った。

”カチッ”

「ふう…あぶないあぶない」

ナオトは行動が早かった。死ぬのが怖くないのか？
ナオトは銃を床に置いた。俺は銃を拾った。

「…」

あと三回のうちで、弾は発射される。

「ふふふ…怖いかな？」

「兄さん…もう…もうやめよう。意味ないよ、こんなこと…」

無駄だと思いつつも、俺は提案してみた。

「駄目だ。まあ、この女が死んでもいいってんなら、終わってもいいぜ」

「くそっ…」

「そのおもちゃ（拳銃）は30万も出して手に入れたんだ。おもちゃは遊ぶためにあるんだぜ？」

「…」

俺は銃口を頭にあてた。

「頼む…！」

”カチツ”

不発だった。

「ほっ！やるなあ。ぞくぞくするぜ」

俺は銃を床に置いた。

「さて…」

残り2回。さすがにナオトも、少し時間を置いた。

「さあ…シヨウダウンだな」

「に、兄さん…」

「俺が助かって最後の一発になったからって、やめんなよアキラ」

「兄さん…もういいよ。兄さんの苦しみは分かった。もういいよ。親を殺したことも警察には言わないから、もうやめようよ！」

俺は必死になって提案した。

「ふっ…いまさら…。まあ、別にお前には恨みはないけどな」

「だったら…」

「駄目だ。ゲームは最後までやり抜く。それが俺の主義だ」

「兄さん…！」

そしてナオトは、ゆっくりと引き金を引いた。

”パンツ！”

「…！」

血が飛び散った。そして…ナオトは言葉もなく倒れた。

「兄さん！」

俺は兄に駆け寄った。兄は動かなかった。

「兄さん！兄さん！」

兄はまったく動かなかった。

「そんな…」

俺は涙を流した。その時ばかりはまゆみさんのことを忘れていた。

「はっ！」

我に返った俺はまゆみさんを縛っているロープを、兄が持っていたナイフで切った。

「まゆみさん！」

「アキラ君！」

まゆみさんは俺に抱きついてきた。俺もまゆみさんを強く抱きしめた。

「大丈夫？」

「うん。ありがとう、アキラ君…」

俺はようやく落ち着いていた。そしてふと、兄を見てみた。

「…」

その顔は、なぜか穏やかだった。

「帰ろう…まゆみさん…」

「うん…」

静かすぎる結末。俺の兄を探す旅は…こうして終わりをむかえた。

半年後。

俺は児童養護施設で働いていた。まだバイト扱いだが、ゆくゆく

は資格を取り、正社員になりつもりだ。

ここにはいろんな子供がやってくる。兄のような人間を作り出してしまわないためにも、俺は頑張ろう。そう心に決めていた。

俺には恋人がいた。まゆみさんじゃない。やはりまゆみさんから見たら、俺は年下のかわいい男の子としか見えなかったようだ。早い話が振られたんだ。

ある年下の女性とつきあっている。俺は年上が好きだったが、年下もかわいくていいものだ。最近はそう思うようになった。あの事件が、俺を大人にさせたのかもしれないが…それは分からない。とにかく今はそれなりに幸せだった。

兄は日記を書いていた。といっても、ただのノートに、書きたいことがあるときだけ書いている。そんな感じの日記だった。

ほとんどが、世の中への不満、社会への文句ばかり。それ以外といえば、そう、父と母を殺したこと…そんな悲しい日記だった。

そして最後の日記は、こう書かれていた。

” 月×日。今日は弟とゲームをする。命がけのゲームだ。しかし、たぶん俺は負けるだろう。俺は生まれもって運のない人間だ。親に見捨てられ、時代に見捨てられ、社会に見捨てられ、俺は生きてきた。最期にひとこと言うことがあるとすれば、こうだ。あばよナオト”

俺は言いようなない感情があふれ、泣いた。そして兄を心から許した。

俺は生きる。精一杯生きる。

死んだ父のため、死んだ母のため、死んだ兄のため、恋人のため、そして…自分のために…！

t h e e n d .

(後書き)

ありがとうございました。

よかったら感想などお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2939m/>

ブラザークエスト その4

2010年10月8日14時30分発行